

皮肉から紡がれる歴史

—書評: *Cold War Encounters in US-Occupied Okinawa*—

西川和樹

本稿は小碓美玲、*Cold War Encounters in US-Occupied Okinawa* (未邦訳)の短い書評である¹。この本には本当に様々な論点が含まれているので、ここでそれぞれを隈なく論じ尽くすことはできない²。本書の要点が述べられた記述を端的に引用すれば、「占領期の沖縄において、ドメスティシティは「帝国のエンジン」として中心的な役割を果たし、冷戦下の拡張主義的な力学に女性たちを動員する一方で、その女性たちが支配的な権力作用そのものに加担していることを非政治的にし、隠蔽した」となる³。この引用にあるように、本書は占領下の沖縄、冷戦下のアメリカ帝国主義、女性の動員、「家庭内の」とも訳されるドメスティック (domestic) な領域に関するものであるが、この本はそれぞれの言葉が指し示すものの短絡的なつながりに収まるものではない。冷戦構造下、アメリカ帝国主義と密接に関わりながら活動を展開した日米の女性たち——その生の軌跡を精緻に追うことで、歴史記述において「皮肉」という態度を保つことが、未だ語られざる権力作用の展開を明らかにするうえでいかなる効果を持ち得るのか、本書はその可能性を開こうとしているように思う。本稿はその線に沿って話を進めていく。

本書は家政学に携わる女性の活動に焦点を当てながら、家庭に関する諸々の知識と技術を扱う家政学の領域が、異質な他者を統治する帝国主義の権力作用と、いかに親和性が高いかということを示唆している。これが示唆するのは、帝国の統治というしばしば途方もなく遠い出来事が、実は人々の日常を構成する家庭に現れているということで、筆者は本書を読みながら、十年ほど前に経験したある出来事を想起した。

筆者がフロリダ州のある家庭にひと月ほどホームステイをしていたときのことで、滞在先の家庭に到着すると、その家族は、お客を招いたときに当然するものとして家のなかを案内してくれた。そこで印象に残ったのは、キッチンである。十分なスペースをもつそれは、家事が滞りなく遂行されるように綿密に動線が計算されていて、コンロ、オーブン、冷蔵庫、食洗器などが無駄なく並んでいた。暖かな雰囲気を演出するように照明まで工夫されたシステムキッチンは、とても

魅力的にみえた。実際その滞在のなかで、自分は何度もこのキッチンの使い勝手の良さに感動し、今も個人的なアメリカ体験はというと、「なんて合理的な。」と感嘆せずにはいられなかったこのキッチンを思い出す。

同時に、ライフル銃の記憶がある。キッチンの案内が終わると、次に寝室へと招きいれられた。「これを見て」とベッドの下からおもむろに取り出されたのは、数丁のライフル銃だった。熱心にその仕組みを説明する滞在先の主人の口調から、その銃が彼らにとっていかに大切なものかが伝わった。初めて手にするライフル銃はずしりと重く、これがベッドの下から取り出されることの困惑と怖さを感じたことを覚えている。

これら二つは別々のものとして記憶されていた。一方は家庭の安寧と豊かな暮らしを支えるキッチンであり、もう一方は、アメリカという国の理念と暴力を象徴する銃である。しかし、それらは別々のものではなかった。本書を読む経験は筆者にとってまず、それぞれ別々だと思われたキッチンとライフル銃が、実は深いところでつながっていたのではないかと問い返されるものであった。比喩的に言えば、本書はアメリカのキッチンのグローバルな広がりが、「皮肉にも」銃の広がり重なってしまうことの力学を描き出しているのだ。

本書の記述において重要な役割をもつ家政学者、翁長君代もまたアメリカのキッチンを称賛する。彼女によるとアメリカのキッチンは「解放的な」性質を持つ。アメリカで手に入る科学技術によって家事の負担が減り、女性に余暇とゆとりをもたらすことを翁長は称賛するのである⁴。翁長は東北の貧しい地域に生まれ、そこで質素儉約を通して生活を支えるという姿勢を身に着けた。家政学の専門的な教育を受けた彼女は、戦中、日本統治下の朝鮮で活動する。そこで家庭運営に関する知識や技術の普及に貢献することになるが、その活動は戦後、夫の出身地である沖縄に居を移してから変わらない。翁長は設立間もない琉球大学に赴任し、そこを拠点として、海外の家政学者と交流を進めるとともに、沖縄の女性に家政学の知識を広めた。本書では他の幾人かの家政学者の活動がたどられるが、家政学を生業とするものが描く生の軌跡は、一義的な解釈に還元されるものではない。

家政学という知の体系はそれを習得した女性にとっていかなる意味をもっていたのだろうか。翁長がアメリカのキッチンを「解放的」だと言うとき、そこには家政学という領域が翁長の眼前に切り開いた可能性もまた織り込まれていたはずである。実際、多くの女性にとって家政学は解放的なものであった。それは女性たちに専門的な知識と職業を授け、未知なる土地へと旅立たせ、地域横断的な人のつながりを与えた。沖縄家政学の嚆矢として諸外国を訪れ、草の根的な人的交流を進めた翁長を特筆すべき例として、家政学は他の多くの女性に社会を担う存

在となることへの機会と快樂を与えた。ここに家政学を生業とするもののひとつの皮肉が存在する。つまり家庭内の種々の知識や技術を探求することが、自身を家庭の外へと導くのであり、遠く離れた土地の人々との出会いをもたらすのである。そして外へ外へと広がろうとする家政学者の動きは図らずも、帝国の拡大主義の力学との出会いの場となるのである。

家政学と女性の関係はしばしば、それが女性に解放への道筋を切り開いたという点で好意的に記述される。翁長のほかに尚弘子やエレノア・デンスモアなど、本書で記述される多くの女性は、家政学を媒介にして独自の生の軌跡を描いており、そうした軌跡は、社会的、政治的資源から女性を排除してきた男性的な社会秩序に対して異議申し立てを行う可能性に満ちている。さらにそれが人々の暮らしを途方もなく破壊した沖繩戦、その後続く占領政策という沖繩の歴史的な文脈に引き入れられたとき、解放の歴史は同時代の数少ない美しい出来事としてより一層際立つかもしれない。そうした解放的な事象に目を向けることは歴史記述のひとつの方法でもあり、実際にそうした記述が求められる場面も多いだろう。しかし、そうした記述は美しくはあるが、それ以上でも以下でもなく、そうした美しさが何によって生み出されたのかという問いを往々にして隠してしまう。本書で問われるのは、それがいかなる種類の解放であったのかということである。つまり、家政学が女性の解放的な生の軌跡を描き出す一方で、その軌跡が図らずも帝国アメリカの統治の一端を担ってしまう、そうした皮肉な状況に肉薄して記述することが本書の白眉である⁵。文学者や政治学者が戦後、戦中の自己の活動に思い悩み否定的な自己省察を余儀なくされたのとは全く対照的に、家政学者は、戦前、国民の生活に介入し健全な身体を作り出そうとしたまさに同じ姿勢で、戦後、人々の家庭に入り込み、生活を改善しようとするのが許されるのだ。こうした状況は、帝国主義的な統治という社会的、政治的状況にかかわって、家政学者がいかに複雑な位置にいたかを示す証左となる。戦前の帝国日本、占領下のアメリカ帝国、家政学者は常に帝国主義的な統治の形態に巻き込まれていた——こうした状況を形容しようとするとき、適切な言葉は「皮肉にも」となるだろう。

アーリー・ホックシールドによると、「皮肉」とは他者に対する根本的な理解にかかわるものであり、物事に対する様々な見方を用いたときに現れる言葉遣いである⁶。そうだとすると、皮肉から紡がれる歴史記述、つまりある出来事に対して様々なものの見方のあいだを跳梁しながら書き進められる文体は、暗闇のなかの一筋の美しさを捉えるだけでなく、その美しさが何によって可能になったかをも明らかにすることができる。ドメスティックな領域に身を置くものたどる生が、帝国アメリカの統治の力学と重なるとき、その生が描く軌跡は沖繩からミシガン、ハワイへと地域横断的な線を描き出す。そうした道筋は解放であるのか

統治であるのか、重要なのはその両方であるということであり、そこから描かれる風景は、そこで生きた人々について未だ語られない諸相を明らかにするとともに、皮肉から歴史を紡ぐということを開かれる視座の一端を明らかにする。

注

- 1 本稿で参照するのは以下の文献である。Mire Koikari, *Cold War Encounters in US-Occupied Okinawa Women, Militarized Domesticity, and Transnationalism in East Asia* (Cambridge: Cambridge University Press, 2015).
- 2 本稿では本書の詳細な概観を記すことはできないが、ここに本書の基本情報を記す。著者である小碓美玲はハワイ大学マノア校ウィメンズ・スタディーズ学部の教授で、本書は二〇一五年出版、六章立て二三五頁の英語文献である。本書ではアメリカ占領下の沖縄で活動した女性たちに焦点が当てられ、それぞれの章では、本稿で触れる沖縄の家政学者のほかに、軍人妻やアメリカの家政学者などの越境的な活動が精緻に記述される。
- 3 Ibid., 8.
- 4 Ibid., 180.
- 5 皮肉において歴史をまなざすという姿勢は小碓の別の著書でも同様に保たれている。占領下の日本における民主主義と女性の動員の関係をたどった *Pedagogy of Democracy* では、アメリカの占領政策と女性の動員とのあいだの波乱含みの力学にかかわって次のように述べられている。「私が本書を通して示すように、こうした力学から現れ出たフェミニズムの言説と実践はアイロニーと矛盾に満ちている」(Mire Koikari, *Pedagogy of Democracy Feminism and the Cold War in the U.S. Occupation* (Philadelphia: Temple University Press, 2008), 29.)。
- 6 アーリー・ホックシールド 石川准・室伏亜希訳『管理された心 感情が商品になるとき』(世界思想社, 2000), 91. ここで感情労働に関する議論で名高いホックシールドの文献を参照することは奇妙に思われるかもしれない。しかし、女性たちの人的交流を描き出す *Cold War Encounters* において、女性たちに担われる歴史はしばしば、感情の領域を巻き込むものである。小碓が採用する方法論として冒頭で、「沖縄という深く軍事化された領域における、家庭と家政にかかわる女性たちの感情、言説、実践をたどる」(Koikari, 2015, 4.) とされるように、感情の領域が冷戦構造下の統治の様相を描き出すうえで重要な結節点となる。そういう意味で、本書はホックシールドが議論したような感情管理の論点を継承し、帝国の力学と女性の動員という問題系へと援用したものとして読み解くことができる。